



TITLE:

火星の接近 : 1933年3月

AUTHOR(S):

高城, 武夫

---

CITATION:

高城, 武夫. 火星の接近 : 1933年3月. 天界 1933, 13(143): 89-91

ISSUE DATE:

1933-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162328>

RIGHT:

## 火 星 の 接 近

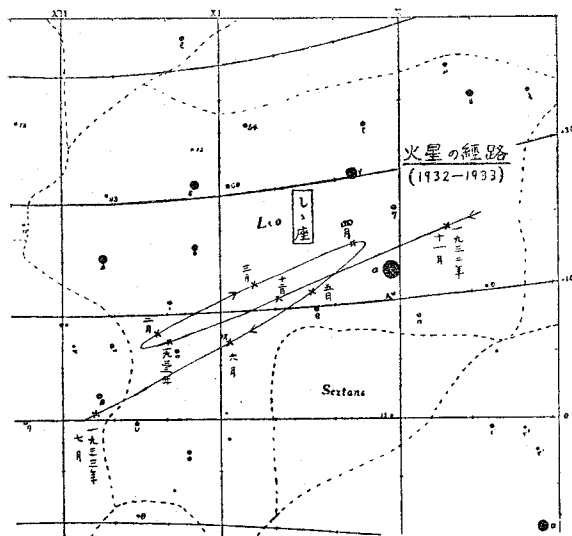
—1933年 3月—

高 城 武 夫

二年二ヶ月の待望期間は満ちて、又しも我が地球の友胞「火星」が近づいた折も折、地上は花の三月、仰げば火星は天上に咲く一輪の華として輝き、昨今の閑散な天上界の静寂を破つて、その赤い巨光は群星を壓倒しつゝ、地上の汎く是を望む人々に期待される、その深き真と、美と、雄と、奇とを齎して、吾が親しき火星は、いとも華やかに接近する。——陽春三月、長閑かるべきこの下界は、國の内外物議騒然として、極東に漲る暗雲は熱して正に戦火を焼かんとしてゐる有様、遇々火星の襲來を想ふ時、その敏捷なる活動と赫々たる光輝を備ふる事によつて、古來より神話中の傑作「軍神」と呼ばれるこの火星までが、忠實なる二名の護衛者(衛星)フォボス、ダイモスを引具して、遠き天空より、雄々しくも我に挑戦し來る如くであつて、天體觀測者は等しく吾々の唯一の武器「望遠鏡」を揃へて、この天上の襲撃者に備へねばならない。

火星は昨年十月以來獅子座に入り、本年一月下旬獅子座の東端で「逆行」に移り、折柄近傍で同じく逆行中の木星と相並んで、一方の赤色に對して他方の白色の好一對の巨光を放つ兩遊星が、冬の夜更け、全天の雄オリオンに漸く西方に傾く頃、約80°の東方に、相次いで現れ、深更の空を飾つて來た。二月になると火星は愈々地球に接近し、十六日に遠日點を通過する。この頃木星の光度負2等に對して、火星の光度は負0.4等より負0.9等まで變化し、堂々木星と對抗しつゝ、最早や西方に近く輝くレグルスなどは眼中になくなる優勢である。火星の運行は實に目醒しい速さである事は之れでも解るが、この間、火星可視直徑の變化は、この月始め12秒であつたのが、月末13.7秒となり、益々木星に切迫しつゝ、三月二日午前五時に「對衝」となり、明けて三日午後十時地球に最も接近することになる、日本では丁度火星は天頂近くを通過する頃であるから、専門家と言はず、素人と云はず、晴天なればこの遠來の客と飽かず相對應する事が出来る。この時の火星の光度は負1等、視直徑は約14秒、地球との接近距離2500萬里(約1億キロ米)になる、この好機

會に於いて、相當の大口径の望遠鏡によつて、火星を観察する時は、所謂、世上の論題として、廣く一般の人々の最大好奇心をそそる「火星表面」を精細に打眺める事が出来るが、この火星表面に存する天體生物の疑問こそ、久し



く學界の論議の焦點として古來より多數の之が解疑の貢獻者を輩出して來てゐるが、今度の火星接近に於いても、同様な目的の爲めに、觀測研究と多大の興味が待望されて、専らそれらの主力がこの點に集注される事になる。

火星の地球への接近週期は、小にしては二年二ヶ月であるが、最も近接が要求され、精密觀測の全効果を挙げ得るのは約十五年週期であつて、相當待遠く思はれるが、この時は、火星の視直径は約25秒、距離約700萬里までに近づく。之れに比較すると、今回の接近は、餘り効果的のもので無いかも知れぬが、唯要するに、火星の觀測研究家は、一律せる忍耐を持つて、その近接機毎に忠實に實地觀測を繼續するに有るとされてゐる。三月十一日には、満月に近い月が、火星の北方 $4^{\circ}30'$ の處を通つて行くが、この日の前後二三日は、火星の望遠鏡的觀測は少なからず妨害されるであらうが、この珍しい天體現象は、返つて肉眼的に觀察して、美麗な立體光畫を現出する事であらうと思はれる。この時の現象は、精しく云へば火星と木星と月の三天體の外に近く海王星が、同じ獅子座中に運行してゐるので、望遠鏡的には月に對して、珍しくも三遊星が會合する事になるのである。同様な會合現象は、(火星の光輝は少し劣へて來るが)四月七日の夜半にも現出する。然しこの場合は火星の北方 $2^{\circ}46'$ の處を月が通る。——以上の如く火星は三月初めを峠として、

其後は追ひ追ひ後退時季となり、観測者達に淡い哀愁を残して、その奇妙活潑なる運行性を續けつゝ、さながら、消前の燈の如くに、立去つて行く——四月十三日獅子座の首星レグルスの北方に近く、一旦「停留」となり、次ぎに東方へ「順行」の旅を續け、行路を赤道へ向けて南下し、初夏の候には木星と共に宵空の輝星として、暫くは天空を賑はす事になる。

扱て、火星はその公轉週期 687 日であつて、地球の約二ケ年に相當する、即ち春夏秋冬が約半ケ年づゝも續く有様である。丁度火星世界の北半球は昨今眞夏の候であるから、高倍率の望遠鏡に依れば、北極は小さく、白色の「極冠」を見出す事が出来る。この外、火星表面を綾どる多數の「運河」と稱せられる條線をも見出す事が可能であり、又赤色に輝く火星の廣範な沙漠内の此處、彼處に、綠色のオアシス——植物帶、——も色模様をなして、映ゆるのを發見するのもしして困難ではない。上述の如き火星表面の精細觀察の出来る観測者達の唯一の興味は、火星スケッチであつて、望遠鏡で覗いてはその表面模様を描畫する事である。

「火星の國」と云へば、直ちに其處に生物の存否が問題となる。表面溫度は平均  $20^{\circ}\text{C}$  で地球の溫帶地方の平均溫度に近く、氣壓は約 10 耗程度で、尙表面には氣體(空氣)があり、水もあり、そして太陽の輻射熱は地球の約四割七分を受入れてゐる。自轉時間は 24 時 37 分 22.6 秒である。この様な條件を並べてみると、如何にも地球表面と酷似する點があるので、勢ひ、火星國人を想像するのであるが、果してかゝる環境條件に於いて、生物、殊に高等生物「火星入」が生棲し得るか否やは天文界の論外であつて、この問題は寧ろ生物學者の研究範圍に屬するものと云はねばならぬ。四年前の火星接近の時等は、英國で火星と無線通信を行つて、大いに地球人の氣焰を擧げる計畫であつたのが、終ひに何等の反響をも齎さなかつたと云ふ話は、近代的ナンセンスの最大のものであらう。

火星に關する研究題目、或は不可解なる疑問は數限りなく續出する、此度の火星の來訪を迎へた機會に、手近かな記載を繙いて、過去の記憶を新にし、天頂に迫る火星を窺ひつゝ、自由な想像を猛しくするのも愉快的事であらう。